
ピータンとの徒然なる日々

田中太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビータンとの徒然なる日々

【Nコード】

N0038Z

【作者名】

田中太郎

【あらすじ】

地方都市で暮らす俺、田中太郎は喋る犬を拾った。
可愛くも図々しい喋る犬、ビータンとの共同生活が始まり、平穩であつた俺の生活も一変することになったのだった。

はじまりデシ

「どこ行くんデシか？」

いきなり声をかけられた俺は、辺りをきよろきよろと見まわした。今日は日曜日。仕事も休みでひさしぶりに映画でも見ようかと思いい立ち、誘う相手もないままに出かけた寂しい休日。

駐車場から映画館までの道中で声をかけられ、可愛い女の子ならと思っではみたものの、その声はどこかまだ子供のようで、俺は淡い期待を萎ませながら声の主を探す。

道路は横幅二メートル程度で、電信柱が一本、左手に立っていた。電信柱の影に、一匹の犬がいる。その犬は茶色の毛並みが泥で汚れていて、白いお腹も黒くくすんでいた。垂れた耳と頬。ビーグル犬という犬種だと犬好きの俺にはすぐに分かった。しかし、その犬以外に何もいない。

俺は気のせいかと思って、再び歩き出す。

「どこ、行くんデシ？」

また声が聞こえた。

今度はすぐ近くからだ。

俺は足元を見た。

先ほどのビーグル犬と目が合う。

ビーグル犬は目が合った瞬間、長い尻尾をピンと跳ねあげ、グルグルと回転させた。

「おかしいな……。お前以外、誰もいないよな」

「デシよ。僕だけしかおらんデシよ」

「だよな。気のせいだな」

俺は頭をかきながら歩き出そうとして、その足を止めた。

振り返ったそこには、ビーグル犬が口を微かに開いて俺を見ている。

「俺に話しかけたの、お前か？」

ビーグル犬はタタツと俺に駆け寄ると、俺の隣に二本足で立った。犬が二本足で立った！

「どこ行くんデシか？ 良かったら案内するデシー」

俺はこの時、少し前にしていたドラマを思い出した。犬が喋りだす内容のものだ。毎週、楽しみに観ていた。それは犬、いや動物が好きだからだ。しかし飼うことはできない。なぜなら、俺は今一人暮らしだから、手間のかかる動物を飼う事など不可能なのだ。猫ならと思ってみたが、猫アレルギーである俺には無理な話だった。

「……映画を観に行くんだ」

俺は混乱しながらも、とりあえず質問に答えた。

「そうデシか。映画、僕も好きなんデシよ。あれ、美味しいデシよねえ」

そのビーグル犬は嬉しそうに話し「こっちデシよ」と言って、俺を先導しようとする。

先導されなくとも、映画館の場所は知っている。

それに、どうしてこの犬は喋っている……？

「なあ、お前……」

俺が数歩先を二本足で歩くビーグル犬に声をかけた時、くるりと身体を反転させて俺に振り返る。

「ああ、自己紹介がまだだったデシね。僕はビーグル犬のビータンというデシよ。賢く凛々しいオスデシ。体重は八キロと九キロの間。最近はちよつとご飯を食べてないデシから、体重が減ってるんデシよ。好きなものは散歩と優しい人デシ」

よく喋る。

そして俺の聞きたい事には全く答えていない。

俺が再び口を開きかけた時、映画館が前方に見えた。俺は腕時計を確認する。インターネットで予約した時間まで、あと五分と迫っていた。

「悪い。急ぐんだ。じゃあな」

「あ……」

俺に追いつがろうとしたビータンだったが、映画館の入り口へと走る俺は振りかえらなかつた。

チケットを購入し、指定のシネマまで歩く通路の窓ガラスから、映画館前の道路をとぼとぼ歩くビータンの背中が見えた。尻尾が垂れ下がり、長い耳が何か顔を隠すように垂れ下がっていた。

俺は胸の奥がズキリと痛むのを感じたのだった。

二時間後、俺は映画館を出た。

楽しみにしていた映画だったが、全く集中できなかった。ビータンのせいだ。

映画に集中しようとすればするほど、あいつの後ろ姿が脳裏によぎる。しょんぼりとした背中と足取り。

迷い犬なのだろうか。

捨てられたのだろうか。

いやいや、それ以前の問題だ。あいつはどうして言葉を喋っているんだ？

汚れていたが毛並みを見る限り、決して老犬ではないだろう。

そんな事を考えながら歩く俺の視界に、先ほどの電信柱が入った。俺は無意識にビータンの姿を探す。

しかし、そこにはもういなかった。

無理もない。彼は繋がれていたわけではない。自分の意志でどこにも行けるのだ。

俺は駐車場までわざとゆっくりと歩いた。しかしあの子供のような声は聞こえてこなかった。

ついに駐車場が見えてきた。

俺はズボンのポケットから財布を取り出し、清算機の前に立った。

「こら！ あっち行け！」

「ごめんデシ！」

男の怒鳴り声と、ビータンの声が耳に飛び込んできた。

その方向を見ると、中年男性と小さな女の子、そしてビータンの

背中があつた。

「ビータン！」

俺は叫んだ。

男に追い払われたビータンが、垂れた耳を激しく動かす。

「ビータン！」

俺はもう一度、彼の名前を呼んだ。

ビータンが振り返った。

目が合うと、小さな身体を震わせるようにして尻尾を振った。そして一目散に駆け寄って来る。

俺はもう決めていた。

こいつと一緒に帰ろうと。

どうして俺が、こんな変な犬をこうまで気にしてしまったのか分からないが、名前を呼ばれて嬉しそうに駆け寄って来るビータンを見て思った。

「そんな事は関係ない」と。

ビータンと一緒に帰りたいという気持ちが大事なのだと自分に言い聞かせた。

ビータンは俺の足元で立ち止まると、遠慮がちに俺を見上げた。

「腹減ってんだろ。帰るぞ」

ビータンが首をかしげて俺を見る。

「行くところ無いんだろ？ いいよ。見つかるまでうちにいる」

ビータンは目をくるくるさせて、俺に飛びついてきた。その小さい身体を抱き上げ、頭を撫でてやると尻尾を激しく振る。

しばらく撫でてやっていたが、俺はどうしても言わなければならぬ事を口にした。

「お前、相当に臭いからな。帰ったら飯より先に風呂だ」

ビータンの尻尾が力なく垂れ下がったのが見えた。

俺は田中太郎。ありきたりの名字にありきたりの名前だが、それが逆に珍しいとよく言われる。二十八歳独身。実家を出て、一人暮

らしをしている。といつても、持家に住んでいるので家賃はかからない。この家は祖父母が住んでいたいわば実家の実家にあたる。しかし、祖父が他界し、祖母が両親と同居しはじめ、この家は誰も住まなくなってしまった。

「人が住まなくなると痛むのも早いからな。お前、住め」

親父に言われて一人暮らしがスタートしたのが三年前。古くて狭い家だが、一人で住むには何も問題はない。あえて言うなら駐車場まで徒歩五分かかる事くらいだろう。

その古い家の風呂場で、ビータンはおとなしく俺に洗われていた。犬用シャンプーが無かったので、今日のところは俺の使う石鹸で洗っている。肌に優しいタイプだから犬でも大丈夫だと、無理やりに自分とビータンを納得させた俺は、泡まみれになったビータンの垂れた耳をひっくり返した。

「うわ！ 汚いな。真っ黒だぞ」

ビータンが恥ずかしそうに顔を伏せた。俺は彼の耳に鼻を近づける。

変な臭いがする……。

「お前、これ多分、病院に行かないといけない事になってるぞ」

「……そこは美味しい物、あるデシ？」

ビータンにとって、美味しいかそうでないかが一つの判断基準であるようだ。

耳の中も石鹸と湯でこれでもかというくらい洗った俺は、耳の皮膚が爛れているのを確認した。

耳の垂れた犬種は、耳の病気にかかりやすいと職場の先輩が言っていた気がする。

ビータンにシャワーを当てながら身体をさすると、面白い程、毛がごっそりと取れた。

「すつきりしたんじゃないか？」

「かゆかゆが無くなったデシよ」

茶色く濁った湯が排水口へと流れ、そこにこんもりと毛だまりが

出来ていた。俺はそれを手ですくってゴミ袋に放り投げる。

ビータンを抱き上げ、脱衣場に移動すると、彼がそこで身体を激しく震わせ始めた。

俺の顔に大量の水がかかった……。

「ふいー。最高デシ。風呂って最高デシね」

床に引いたタオルの上で転がりながら、ご満悦の表情でそう話したビータンを見て怒る気もおきない。ドライヤーのスイッチを入れ、ビータンの濡れた身体に当てる。

垂れた耳がドライヤーの温風でゆらゆらとしていた。

「ちよつと熱いデシ」

「ああ、悪い」

ドライヤーの口を離してやると、ビータンはそこで大の字になって俺を見上げた。

「おっちゃん、優しいデシ」

「……お兄さんな」

訂正すべきところを指摘して、すっかり乾いたビータンを居間へと入れてやった。

俺の住む家は全室、畳だ。これまであまり気にしてなかったが、ビータンと一緒に暮らすとなると、畳の上に絨毯かシートがいるなと考えながら、時計を見る。

午後六時過ぎ。

ビータンは俺の座イスの上でひっくり返った。

「僕はここでいいデシ。ここが僕の場合デシ」

意外とずうずうしい。でも憎めない。

「ドックフードないからさ。今日のところはこれで勘弁な」

俺は昨日の残り物を電子レンジで温め、食卓の上に並べる。背の低い食卓で、座イスに座るとちょうど良い高さなのだが、ビータンには少し高いらしい。座イスに『お座り』の格好をして、顎を食卓の上に乗つけた彼は、鼻をスピスピと鳴らしていた。

「ええ匂いするデシ」

「お前はこれな」

俺はご飯を器に取り、それを畳の上に置いてやった。

ビータンはそれと俺を交互に見て、何かを訴えるような目をした。俺はその理由が分からず、しばらく彼を見ていた。

「どうした？」

「やつつけていいんデシ？ やったっていいんデシ？」

そう繰り返して、俺とご飯を交互に見る。

俺はようやくピンときた。

「よし！」

俺の言葉と共に、器に垂れた口をつつこんでご飯を食べ始めるビータン。

間違いないで躑まれている。

迷ったのか追い出されたのか、どちらにしても届けを出しておくべきだと思いながら、俺は自分のご飯を食べ始めた。

食べながら、ビータンがいなくなる日を想像して、少し胸が痛んだのだった。

月曜日、俺は職場へと車を走らせながら、ビータンがほとんど手間のかからない犬だという事に驚いていた。

「散歩、行ってくるデシ」

忙しく朝の支度をする俺にそう告げた彼は、自分でトイレ袋とスコップの入った小さなバッグを肉球で挟むようにして持って出かけて行った。

そして俺が出かけるタイミングで帰宅をしたと思うと、俺が用意していたご飯を食べて、座イスの上で丸くなって寝始めた。

「犬を飼うと散歩があるから大変だと聞いてたんだけどな」

ビータンは自分で散歩に行つて、帰って来る。

家の場所とその周辺を理解しているということだ。近場であれば、ほぼ正確に記憶しているという事なんだろう。

「散歩の時、二本足で歩くのはやめとけ」

俺は一つだけ、注意してやっただけだ。

俺の職場は自宅から車で十五分の場所にある。従業員十人ほどの小さな会社で、俺は調達業務を担当していた。

「はい、しまなみ鉄工です」

電話がなった瞬間、俺の隣に座る広田葉子が電話に出た。彼女は総務と経理を担当している。

電話応対をしながらメモ用紙にボールペンを走らせる彼女の隣で、俺はパソコンでメールチャックをしていた。溶接棒の発注メールを送った先から納期と金額を知らせるメールが届いていた。添付ファイルを開くと、見積書が画面に大きく表示される。俺はそれを印刷し、総務部長であり経理部長である社長の奥さんに差し出した。

「思ったより安くしてくれてますよ」

俺の差し出した見積書に目を通した社長の奥さんは、にっこりと笑って頷いた。

「これなら社長に見せるまでもないわ。頼んじゃって」

「はい」

便利な世の中になったものだとこぼす奥さんの声が耳に入った。

奥さんはいつも

「昔はわざわざ見積書一枚でも運んでた時代だったのよ」

と俺達に話す。確かにファックスもインターネットもない時代だと仕方ない。

昼休憩になった。

俺は自分で握ったおにぎりを机の上に並べ、スーパーでまとめ買っていたインスタントラーメンにお湯を淹れる。

「田中くん。これあげる」

広田葉子が唐揚げを分けてくれた。

母一人、子一人の彼女の家では、料理は全て彼女の担当らしい。唐揚げも買ってきたものではなく、自分で作ったものだった。

「ありがとう。いつも悪いですね」

さくさくとした衣を噛みしめると、中から鶏肉が現れる。

美味しい。

ピータンにも食べさせてやりたい。

でも、犬には毒だ。

狭い事務所の中は、俺達三人だけ。職人さん達は工場で昼食を取る。だからといってはなんだが、自然と奥さんと広田葉子の会話に俺が加わるという図式が出来上がる。

しかし、今日ばかりは違った。

「あの、腕の良い獣医さんを知りませんか？」

俺が二人に尋ねると、二人が視線を重ねた。そして、それをほどこいた時、広田葉子が俺に笑みを向ける。

「何を飼い始めたの？」

「犬なんだけど……子犬じゃないよ。もう大きいんだ。いや、大きくはないけど成犬というか」

「犬？　なんて犬？」

「ビーグル犬なんだよ」

広田葉子は目をキラキラさせ、「いいなあ」と言っただ俺を見る。

奥さんの笑い声がそれに重なった。

「あんた、ちゃんと散歩に連れて行きんさいよ」

「それは大丈夫ですよ」

一人で行ってるからとは言わず、笑みだけ返した。

「向島の小島さんとはどうじゃろう？　いつも一杯よ」

奥さんの言葉に俺は記憶を辿った。その動物病院なら通勤途中にあるから分かる。うす汚い外観の小さな病院だが、そうか腕はいいのか……。

「ありがとうございます。連れていってみます」

「平日は夜八時までやってるはずよ。電話して聞いてみんさい」

「そうします」

俺はおにぎりを左手に持って、電話帳をめくった。
あった。

受話器を右手で持ち上げ、電話をかける。

「はい。小島動物病院です」

「あ、初診なんですけど、今日は何時までやってますか？」
電話に出たのは若い女性の声だった。

「八時まで受け付けです。お勤めされてますよね？」

「ええ」

「八時までに受け付けをしてもらう事は可能ですか？」

なかなか親切な人だと思った。普通、ぎりぎりの来院は嫌がられるものなのだが。

「それは大丈夫です」

「動物はどんな子ですか？」

「ビーグル犬です。年はちょっと分からないんですけど」

「構いませんよ。成犬なんですね。症状は？」

「耳の中が爛れているんです。鼻を近づけると嫌な臭いがします」

「はあ、なるほど。分かりました。お名前を頂戴できますか？」

「田中といいます」

「田中様ですね。ではお待ちしております」

「よろしく願います」

受話器を置いた俺に奥さんが身を乗り出してくる。

「どうだった？」

「親切な人でしたよ。今日、行つてきます」

「いいなあ」

広田葉子の囁きが聞こえたと同時に、昼休憩終了を告げるベルが鳴った。

俺は小島動物病院の駐車場に車を停めた。

助手席のビータンは、いささか緊張した顔をしている。

「いいか？ 喋ったら駄目だぞ」

「了解デシ」

敬礼のポーズを取る。どこで覚えたのか……。

車から降り、ビータンを抱えて動物病院のドアを開いた。まだ午

後七時前。十分に間に合った。

「すいません。昼に電話した田中です」

受付の女性に声をかけると、彼女はぱっと顔を上げた。二十代前半のその女性、いや、女の子といったほうがいい外見の彼女は、俺に書類を差し出す。

「こちらに記入して頂けます？　少し待って頂くようになるんですが、お時間は大丈夫ですか？」

待合室には犬や猫の見本市のように、たくさんの人と動物がいた。

「大丈夫です。あの」

「何でしょう？」

受付の女性が座ったまま俺を見上げる。笑顔が可愛い。

「猫アレルギーなんで、外で待っててもいいですか？」

すでに俺の身体は猫に反応していて、鼻水が今にも落ちそうだったし、目も何やら痒くなってきた。

「ああ、そうですか。いいですよ。順番になったらお呼びしますから」

俺は受付用紙に記入を済ませて、脚元で置物のように固まったビータンを抱き上げ外に出る。

「緊張してんのか？」

「なんか、嫌な予感がするんデシよ。ずっと前に、こんな雰囲気のところに来たような気がするんデシよ」

前の飼い主さんにも、病院に連れて来られていたらしい。ふと気になり、ビータンを両手で顔の位置まで持ち上げる。

「去勢してんだな。多分、その時だな」

「きよせいって何デシ？」

「おねえになるってことだ」

「おねえ？」

目をくるくるさせるビータンを地面に置き、俺は病院外にあるベンチに座った。すると見慣れた軽自動車が駐車場に入るのが見えた。

「あれ？」

俺はすぐに気付いた。

あの軽自動車は、たしか広田葉子の車だ。

案の定、広田葉子が運転席から現れ、俺達に笑みを浮かべて近寄ってくる。そして、俺の脚元で固まっているビータンを見て頬を緩めた。

「買い物から帰ってたら、見えたんだよお。可愛いねえ。賢そうだねえ」

彼女はそこにしゃがみ込み、ビータンの頭を撫でた。ビータンは俺をチラリと見て、彼女の顔を見上げた。

「可愛い。目がクリクリだねえ。名前は？」

「ビータンデシ」

「へえ、ビータンね。よろしくね、ビータン」

「こちらこそ、よろしくデシ」

俺が止める前にビータンは喋っていた。しかしそれに広田葉子は気付いてないらしく「可愛い」を連発しながらビータンの頭を撫でる。ビータンもそれが嬉しいのか「グウグウ」と気持ちよさげに喉を鳴らしていた。

犬なのに……。

「けっこう待つのか？」

「うん。俺らより早い人が随分と待ってたから」

「何時くらいまで病院にいる？」

「分からないけど、多分八時くらいまではかかるんじゃないかな」

「よし、差し入れを持ってきてあげるね」

広田葉子はそう言うやいなや、職場では見せた事のないような笑顔をビータンに見せると車に乗って去っていった。

「あのお姉ちゃん、おっちゃんの彼女デシか？」

「お兄ちゃん……」

訂正すべきところを指摘した俺にビータンのにやけた目が飛び込んできた。俺はあわてて首を振る。

「違うんデシか。残念デシ。あのお姉ちゃん、とっても良い人デシ。

優しい匂いするデシもん」

ビータンがじっと、彼女の車が去った方向をみて言った。

そんな事は言われなくとも分かっている。毎日、おかずを頂戴している身だ。しかし、女の子として見た事は無かった。彼女は高校卒業後、ずっと今の会社で働いている。だから、年齢は俺と一緒にだが、仕事場では俺は後輩にあたる。同僚と言えるが、どちらかといえば向こうが先輩、俺が後輩なのだ。だから俺は彼女を先輩として見ていた。だから改めて女として見てないのかと聞かれたら、こっ恥ずかしくてむずむずする。それが例え、犬に聞かれたとしてもだ。

「田中さん。お待たせしました」

病院のドアが開き、受付の女の子が俺達を呼んでくれた。

ビータンを抱きかかえ、診察室に入ると中年の女性が笑顔を俺達に向けていた。

「初めまして。小島です」

「田中です。あ、ビータンです」

「よ……」

挨拶をしようとしたビータンの口を手で塞ぎ、診察台の上に座らせる。ビータンは申し訳なさそうな顔で俺を見上げ、次に小島先生を見上げた。

「体重は……八・七五キロね。ちょっと痩せてるねえ」

「あ、すいません。実は昨日、福山で拾ったんです。迷い犬だと思うんです。こちらのほうで飼い主さんから問い合わせとか入ってませんか？」

小島先生は口を引き結ぶと顎に指を当てた。

「ビーグルのはいわねえ。警察には？」

「今日の夕方、行って来ました」

「うちのほうでも、いろいろ聞いてみるわ。あんだ、迷ってしまったのね？」

小島先生がビータンの顔を覗き込む。ビータンがぐくりと喉を鳴らした。緊張しているらしい。そうと察した小島先生が笑う。

「この子、緊張しちゃってるのね」

彼女は白衣のポケットに手をつ突っ込むと、そこから小さなジャーキーを取り出した。

ビータンの尻尾が激しく回転を始める。

「はい」

ビータンがあつという間にジャーキーを飲み込む。

噛んでいない……。

「ちよつと耳を見せてね」

小島先生が、ビータンの垂れた耳を持ち上げ、ペンライトで耳の中を見て顔をしかめた。そして反対の耳を見る。

「外耳炎になつてます。ちよつと我慢してね」

彼女は綿棒のようなものを、ビータンの耳の中に突っ込んだ。茶色い小さな背中がビクリと固まる。

綿棒の先には、こげ茶色をした汚れがべつとりとついていた。

「お薬を出します。すごく痒いと思うのでステロイドも少し。どんなお薬が効くか調べるから、少し時間がかかりますけど、大丈夫ですか？　なんでしたら、明日にでも寄ってもらったらすぐにお渡しできるようにしておきますよ」

俺は時計をちらりと見た。

午後七時四十分。

広田葉子の笑顔を思い出した。

「時間は大丈夫です。待たせてもらっていいですか？」

診察室を出た俺は、カチコチに固まったビータンを抱えて、受付の女の子に会釈をして外で待たせてもらうと伝えた。

ベンチに座ると、ビータンが俺にすり寄って来る。

「怖かったデシ」

「大丈夫。大丈夫。痛くなかっただろ？」

「いい人の匂いはしてたデシ。でも少し痛かったデシ」

「早く治さないと、もっと痛くなるぞ」

ビータンは、情けないほどに尻尾お垂らしたのだった。しかしそ

れも、わずか二十分後にはご機嫌に回転を始める。

広田葉子、いや葉子さんと呼ぼう。

彼女が俺達の為にお弁当の差し入れを持ってきてくれたのだ。

「遅くなったら晩御飯、作る時間ないでしょ？ これ食べて」

正直、ここまで親切にしてくれるのは明らかにビータン効果である事は分かっている。それでも、俺は淡い期待を抱いていた。それはきっと、ビータンに焚きつけられていたせいもある。

俺とビータンの視線が、俺の膝あたりで交差する。

にやりと笑った彼の目を見て、俺は彼の事をどうしても可愛いだけの犬とは思えなくなった自分に気づいていた。

葉子さんは俺達に弁当箱を渡すと、そそくさと帰って行ってしまった。

ぼつんである。

気のきいた言葉もかけられないまま、俺は置き去りにされた。

ビータンが鼻を鳴らして、二段の弁当箱を嗅いでいる。

「田中さん」

小島動物病院のドアが開き、受付の女の子が顔を覗かせた。

俺はビータンを抱え、お弁当箱を右手に提げた格好で受付で支払いをする。

「ステロイド剤と抗生物質。これはご飯と一緒に上げてください。それからこれは耳の塗り薬です。耳にスポイドに入れてあげたら、耳の付け根を指で揉んであげてください」

受付の女の子が、俺に抱えられたビータンの耳の付け根を指で揉む。ビータンが気持ちよ下げに目を細めて舌を出した。

「全部で五六五〇円です」

俺は明細を見て、診察料が取られていない事に気づく。

「あの、診察料のところが空白ですけど」

受付の女の子が微笑んだ。

「犬を保護するなんてなかなか出来ない事ですよ。こうして病院に連れて来てくださる方なんて稀ですしね。先生がそんな人からは診

察料は取れないっておっしゃってました」

俺はなんだか、幸せな気分になって病院を出たのだった。

車の助手席で、しきりに弁当箱をくんくんとするビータンの目は、まん丸だった。

「卵焼きの匂いがするデシ。アスパラも入っとるデシねえ」

犬の嗅覚はすごい。

俺は弁当箱を開ける前に、その中身を知らされる事になる。

「ビータン、半分こな」

「ええデシよ。僕は卵焼きを優先的に頂くデシから。他のやつは食べてもらっていいデシ」

出会った頃に比べて、すっかりと図々しくなっている。しかもまだ一日しか経っていないというのに。

俺はハンドルを握りながら、ちらりとビータンに視線を向けた。

すると、彼も俺をちらりと見てくる。そして嬉しそうに目をくりくりさせた。

卑怯だ……。

そんな表情をされたら、文句も言えなくなるではないか。

俺はフロントガラスに視線を戻して、大きな溜め息をついたのだった。

助手席で楽しげに尻尾を振るビーグル犬を横目で見た俺は、自然と口元が緩まるのを感じる。

喋る犬、ビータンとの生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0038z/>

ビータンとの徒然なる日々

2011年11月30日13時54分発行